第Ⅰ部
基本構想







研究主題

未来を拓く力の育成

－持続可能な社会を築くための，自立と共生の力を育む指導－

（3年研究 最終年次）

1　研究主題設定の理由

愛媛大学は，大学憲章において「豊かな創造性，人間性，社会性を備え，次代を担う自覚と誇りをもつ優れた人材を社会に送り出すことを最大の使命とする」と謳っている。このことは，附属学校園で軌を一にして果たすべき使命でもある。

附属学校園の幼児，児童，生徒は，これからの知識基盤社会の時代で，地域，日本，世界の次代を支える一人として活躍するようになる。10年後，20年後の未来に大人になった彼らは，附属学校にいた時代を振り返り，何をしたことが自分に役立ったと感じるであろうか。子ども時代にどのような力を付けておけばよかったと思うであろうか。

私たちが，目の前の子どもたちに今，付けて欲しい力に着目し，優れた授業・保育を展開することが重要であることに疑う余地はない。しかし，短期的視点だけでは，子どもたちの未来からの問いかけに答えることができないことも確かである。この子が大人になったときの世界と，そのとき生活しているであろう姿から振り返り，それまでに身に付けて欲しい力，大人になって発揮して欲しい力を考えるという，長期的な視点もあわせてもたなければならない。

このような問題意識から教育学部附属校園では，「未来を拓く力の育成」を研究主題として掲げることとした。「未来を拓く」ためには，例えば自らを社会に役立たせようとする精神をもち，様々な困難にくじけることなく，これまでにはなかった新しい価値を生み出すことが，将来の日本人に求められよう。また，様々な文化的背景をもつ人々と共に，資源浪費型社会を脱して地球規模での持続可能な社会を実現していくことも求められよう。そのため，附属４校園では未来を拓く力に迫る切り口として，子どもたちの「自立（律）」と「共生」を共通してテーマに取り上げることとした。

具体的には，附属幼稚園・附属小学校は「自立（律）・共生する子どもの育ちを目指して」を，附属中学校は「持続可能な社会を築くための，自立と共生の力を育む指導」を，附属特別支援学校は「卒業後の『働く生活』を実現するために」をそれぞれ研究テーマに掲げ，研究を推進する。

附属の４校園は，学校段階も異なり，子どもたちのもつ特性も違う。しかし，それぞれの発達段階や子どもたちの特性に応じて，一人一人の未来を拓く力としての「自立（律）」と「共生」をどう捉えればよいのか，そして「自立（律）」と「共生」を育むにはどのようにすればよいのかを連携して追究していきたいと考えた。

2　中学校の研究主題について

(1)　教育の今日的課題

ＯＥＣＤのDeSeCoプロジェクトでは，自己の幸福と社会の発展をうまく実現させていく思考や行動の特性をキー・コンピテンシーとして，2002年に国際規準をつくった。このキー・コンピテンシーは，次のように整理されている。

○　社会・文化的，技術的ツールを相互作用的に活用する能力
○　多様な社会グループにおける人間関係形成能力
○　自立（律）的に行動する能力

これらは，中央教育審議会がこれからの学力観を模索する中でも審議され，今回の新学習指導要領にも大きな影響を与えており，「生きる力」の理念の根幹に関わるものである。これらキー・コンピテンシーから分かるように，これからの教育は，社会との関わりの中で「なすことを学ぶ」「共に生きることを学ぶ」「人として生きることを学ぶ」ことを大切にした指導が期待されている。

(2) 本校生徒の実態

本校生徒は生活態度が落ち着いており，与えられた課題や仕事に誠実に取り組む。生活全般についてゆきづまりを感じている生徒や人間関係及び学力を後退させる恐れのある生徒は大変少なく，大部分の生徒が気力に満ちた生活を送っている。生徒を取り巻く周囲の期待は大きく，生徒もその期待に応えたいという気持ちが強い。しかし，その反面，他者の評価を気にする傾向が強く，目標設定も行動決定も他者に依存し，主体性に欠ける面がある。また，生徒に失敗をさせないための周囲の過度の配慮は，生活の中で問題に直面したときにそれを乗り越える知恵やたくましさを奪ってしまっている所がある。そのことも影響し，自分を客観的に見つめる目が十分に育っておらず，自分を過大評価したり，過小評価したりしてしまいがちで，何らかの不安感を抱いている生徒がやや多い。この不安感について各種の調査を取り入れ，分析した結果，「自分」に対する不安感を抱いている生徒が多かった。

このような生徒の実態と教育の今日的課題を踏まえ，「社会に関わり，よりよく生きる」ことを目的として，「今，この生徒に必要な支援の方向」という視点を明確にもって研究・実践を進めていくこととした。

(3) 中学校研究主題設定の理由

義務教育の最終段階を担う中学校では，「未来を拓く力」を「これからの社会を築く一人としての自覚をもち，社会に自ら寄与する力」と捉えた。社会の変化に対応するだけでなく，これからの社会を維持・発展していこうとする意識と実践力を育てることを目指したいと考えた。

20世紀後半からの科学技術の飛躍的な進歩などにより，世界は情報化，国際化が急速に進展してきた。これらに伴い，私たちの生活は物質的に非常に豊かになり，便利になった。反面，地球温暖化や酸性雨などの環境問題，人権侵害や異文化間のあつれきが生む問題，貧富の格差をはじめとする経済問題など，他の地域で起こった問題が，私たちの生活に直接影響を与えることが多くなった。これらの問題の多くは，国家間を越え，いろいろな要素が複雑に絡み合い，簡単には解決できないものばかりである。

しかし，これら様々な問題の解決ができない状況が続くと，今の社会を将来の世代にまで維持できないとの危惧が高まってきた。「世界中の人々や将来の世代までもが安心して暮らせる社会」すなわち「持続可能な社会」を実現するためには，世界で起こっている問題に，私たち自身が自覚をもち，協力し合いながら解決していくことが不可欠である。

我が国が，「持続可能な社会の実現」を世界に提案したことをきっかけに，2005年から「国連持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）の10年」がスタートした。今回の学習指導要領の改訂の趣旨にも「持続可能な社会を築く」意図が盛り込まれ，特に社会科や理科，技術・家庭科には明示され，これからの教育の目指す方向として位置付けられている。持続可能な社会を築くためには，環境，人権，経済などの知識を基に正しく判断する力はもちろんのこと，これら山積する問題を，自然・人・社会と自分とのつながりを意識しながら，一人一人が自分の問題として捉え，解決に向けて自ら知恵を絞り，周りの人々と協力し合いながら行動する意欲と態度を育成することが重要である。このような自立と共生の力こそ，「これからの社会を築く一人として自覚をもち，社会に自ら寄与する力」と考えた。そして，このような力を全教育活動を通して培うことが大切であると考え，中学校の研究主題を「持続可能な社会を築くための，自立と共生の力を育む指導」とした。

3　育成したい力

研究を進めるに当たり，持続可能な社会を築くための自立と共生の力をどう捉えるか検討することにした。そこで，「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ＥＳＤ－Ｊ）が提唱している「価値観」，「育みたい能力」，「学びの方法」を基に，持続可能な社会を築くための自立と共生の力を次のように定めた。

【持続可能な社会を築くための「自立」の力】
① 広い視野で，物事を客観的に判断する力
② 問題の本質を見抜く力
③ 理想の自分や社会の姿を思い描く力
④ 実現に向け粘り強くチャレンジし続ける力
⑤ 課題解決にむけ，自ら考え，見通しをもって解決する力
⑥ 解決の過程や結果を振り返って修正・改善する力
⑦ 自分の気持ちや考えを表現し，伝える力

【持続可能な社会を築くための「共生」の力】
① 多様な価値観を認める力
② 互いの個性を尊重する力
③ 社会の形成者としての自覚をもち，他と協調しながら自ら進んで行動する力
④ 現在，そして将来にわたり社会的・経済的に公正な社会を，築こうとする力

これからの社会で生きるためには，目先のことだけに心を奪われ，自分の利益のために生きるのではなく，自分自身を含めた社会全体を見渡す広い視野と先を見通す力，物事の本質を見抜く力をもつとともに，周りを自分と同じくらい大切に思える豊かな心を培う必要がある。生徒にこのような力や心を育てれば，だれもが安心で幸せに暮らせる社会を築くための実践力が育つと考えた。

4　これまでの研究の成果と課題

(1)　１年次研究

１年次，上記の力を育成するために，各教科研究領域で様々な指導方法を工夫し，成果をあげた。これらを集約すると，大きく以下の四つに分けられた。

【イメージする力を育てる指導】
○ 国語科や社会科で，歴史上の人物やその背景となる社会，現代における他地域の社会などを，様々な情報を手がかりに想像する学習活動を設定した。それらを通して，その時代やそこに生きた人々に対する興味・関心及び追究意欲をさらに高め，生き生きと学習に取り組む生徒の姿が見られた。
○ 音楽科で，メロディーから受け取るイメージを歌詞に表現したり，歌い方を言葉で表現したりする学習活動を工夫した。そのことにより，生徒が自らの心の動きを表出させながら，音楽をより深く，美しく極めていこうとする姿が見られた。

【課題意識をもって自力解決する力を育てる指導】
○ 数学科で，個人追究の生徒の気付きや疑問点を板書し，それを手がかりに自力解決を促す指導（フリークライミング学習）を行った。難易度の高い課題であっても，生徒個個の状況に応じて自分で解決しようという意欲を持続させることができた。
○ 理科で，学習課題を追究するための実験を，生徒自らが計画する場を設定した。班で実験計画を考察する場面では，生徒が顔を寄せあって活発に話し合い，また，その経験をしっかりと個人の実験計画にいかし，よりよいものを立案することができていた。

○　技術･家庭科で，体験的な活動を重視し，試行錯誤の機会を保障したり，データベース化した情報を活用させたりする学習活動を工夫した。生徒の知的好奇心を喚起し，学習意欲を高めるとともに，理解に時間を要する生徒にとっては自分のペースで学習できる機会の保障につながった。

【表現力を高める指導】

○　理科で，根拠と結果を明確に意識させるためのワークシート記述についてフォーマットを提示した。これにより，他者に伝えたいことを的確に表現し合う生徒の姿が見られた。小集団学習でコミュニケーションボードを使って共通の学習の場づくりをした。これらの工夫により，学習を進めるごとに生徒のワークシートの記述がより的確にかつより豊かに成長した。

○　社会科や技術・家庭科で，多様な表現方法を体得させるために，情報端末機器や電子黒板を活用させる場面を設けた。情報機器を巧みに操作しながら豊かに表現したり，表現する場面においてさらに効果的な機器の活用について思考・実践したりする生徒が見られた。

○　数学科や美術科などで，ワークシートに，自分の考え，疑問に思うこと，他者の考え，新たな自分の考えなどをそれぞれ４色に色分けして記述させた。このことにより，生徒の思考の過程や結果を生徒自身に整理させることができた。話合いの場面において，自他の考え方や認識の相違を明確にしながら生き生きと他者と関わり合う姿が見られた。

○　保健体育科で，ペアによるペーパームーブメントにより，ダンスの動きの基礎を身に付けさせ，互いの信頼関係を高めさせた。イメージをダンスで表出させるトレーニングを行った。自分の感情を豊かに表出する生徒の姿が随所に見られた。

○　英語科で，買い物を想定したロールプレイを英語で互いに行い評価し合う学習をさせた。場面に応じて表情をつくったりジェスチャーを交えたりしながら，会話（学習）を楽しむ生徒が増えた。表現することが楽しいと感じさせることができた。

【物事を多面的に見る見方を育てる指導】

○　行く河の時間で，物事をポジティブに解釈するスキルを育てる指導を行った。多面的に物事を捉える効果を生徒自身が感じ，授業で培った見方や考え方を自らの生活に生かしていこうとする生徒の感想が多く見られた。

○　数学科で，単元の学習内容の関連付けたコンセプトマップをつくらせた。数学的知識の構造化を意識したコンセプトマップを作成することができた。

これらの指導に加え，各教科領域で他者との関わりやつながりを重視した学習活動が展開された結果，実態調査等から，生徒の自立や共生の力を育む教育活動が展開されていると大筋では判断できた。しかし，１年次研究を通して，以下の課題が明らかとなった。

○本校生徒の実態調査等から，研究主題に関わる下記ついてその育成が望まれる。
- ㋐　広い視野から物事を客観的に判断する力
- ㋑　問題を自力で解決する力
- ㋒　自分から他に積極的に働きかける表現力・行動力
- ㋓　豊かな自尊心・自尊感情

上記の㋐・㋑は「自立」の力の育成に関わる部分である。また，㋒は共生の力①～③を生徒の実態から捉えなおしたものだといえる。㋓については，培った自立と共生の力を発揮するためのものだと考えている。前述した通り，本校の生徒は自分に対して何らかの不安定感をもっている生徒が多い。そのことから，生徒は有用な力を習得しながらも，自分に自信がないためにそれを発揮できない，という場面があるのではないかと考えた。また，研究を通して，上記㋐～㋓は，それぞれが相互補完的に高まっていくということが明らかとなった。つまり，ある一面において課題が見られる場合において，それのみを捉えてもあまり効果は得られず，多面的に捉えながら，課題解決に向けた教育活動を行わなければならないということである。

(2) ２年次研究

１年次研究の成果と課題を踏まえて，２年次には，次の重点目標を定めた。

○ 広い視野で物事を客観的に判断したり，問題を自力解決したりする力の育成
○ 多様な価値観の社会で，自分から他に積極的に働きかける表現力・行動力の育成
○ 豊かな自尊心・自尊感情の醸成

この重点目標から，各教科領域において，以下のように育てたい「自立」と「共生」の力をさらに明確にして研究を進めた。

教科領域	各教科領域で育てたい「自立」と「共生」の力
国　語	思考力や想像力，自己表現力，多様な価値観を認め互いの個性を尊重する力
社　会	社会的な思考力や判断力，集団や社会に働きかける行動力
数　学	自力解決する力，情報を活用する力，数学を活用する力
理　科	科学的思考力，積極的に他に関わろうとする力
音　楽	仲間と共に美しい音楽を追究し，共有する姿勢
美　術	気持ちや考えを表現し伝える力，多様な価値観を認め互いの個性を尊重する力
保健体育	豊かなスポーツライフを実現する力，自ら課題を設定し解決していく力
技　術	自己学習力（課題を自力解決する力，自ら学ぶ意欲や学び方の習得）
家　庭	社会の変化に対応し，広い視野で物事を客観的に判断する力
英　語	表現力，コミュニケーション力，個性や価値観を認め合う力
行く河	心の能力や技能，自己評価力，自己効力感・セルフエスティーム，人間関係能力

これらの力を育成するために，各研究で設定された指導の工夫（一部）は次の通りであった。ただし，これらは各教科領域別の研究をまとめ，そこから，各教科領域で共通した指導における留意点を見出すために，１年次に「自立」と「共生」の力を育てる工夫として大きく集約した【イメージする力を育てる指導】，【課題意識をもって自力解決する力を育てる指導】，【表現力を高める指導】，【物事を多面的に見る見方を育てる指導】の四つに一応分類したものである。ここに記載している指導の工夫は，それぞれの工夫が多くの育ちにつながっている場合がほとんどであった。これは，それぞれの力が相互関連的に育つことと同様のことである。

教科領域	「自立」と「共生」の力を育てる指導			
	イメージする力	自力解決する力	表現力	多面的な見方
国　語	古人への理解・思考	ことばの吟味・選択	歌の創作	多くの古典教材
社　会	予想する活動の重視	事象と出会う場面の充実	白地図や定型文の活用	図やＫＪ法の活用
数　学	身近な題材の教材化	フリークライミング学習	活用のコツ，４色表現	コンセプトマップの作成
理　科	実感を伴った思考	探究的な学習	定型文での表現	コミュニケーションボードの活用
音　楽	大人との音楽活動	ＶＴＲの活用	体全体を使った音楽活動	多様な視聴覚資料
美　術	塗り絵，アイデアスケッチ	問題解決的な学習	表現と鑑賞の一体化	相互評価場面の充実
保健体育	身近な題材の教材化	情報携帯端末の活用	つまづきチェック表	知識の習得を重視

技術・家庭	コンテンツの視覚化	e-Learningの活用	共有する場面の充実	情報携帯端末の活用
	実践的・体験的な学習	問題解決的な学習	ワークシート・レポートの様式	実践を伴った検証
英語	ロールプレイ	自己・相互評価の充実	多様な表現活動	俳句の創作・鑑賞
行く河	質問紙の工夫	スモールステップによる技能習得	気持ちを表現する活動	リフレーミングの実施

これらの指導の工夫を，それぞれの成果と課題の考察から，指導の効果を上げるための重要なポイントとして，次の点を確認することができた。

【イメージする力を育てる指導】

○ イメージしやすく，学習や事象に対する興味・関心が高まる題材やテーマを設定すること

○ イメージ（予想）したことを表現させ，その相違を説明し合う活動を工夫すること

【課題意識をもって自力解決する力を育てる指導】

○ 単元導入時に強い課題意識をもたせる指導及び題材を工夫すること

○ 自分なりに解決できる課題や学習問題を設定し，その解決の見通しをもたせること

○ スモールステップで課題解決ができるように工夫すること

【表現力を高める指導】

○ 思考を可視化する手立てを工夫するとともに，小集団等での伝え合う活動を充実させること

○ 表現するねらいを明確にし，表現方法やワークシート等の様式を工夫すること

○ 表現の内容や方法が学習を通して成長していることを，生徒自身に見取らせること

【物事を多面的に見る見方を育てる指導】

○ 多面的・多角的に追究できる課題や学習問題を設定すること

○ 見方や考え方の広がり深まりにつながったきっかけを生徒に捉えさせること

○ 小集団や全体の場面での練り合い・高め合いの活動を工夫し充実させること

これらの成果を生かしながら，また，それぞれの力が相互関連的に育つことに留意し，本年次は，各教科領域の研究においてその精度と指導の工夫の効果を上げていくこととした。

5 研究計画

研究年次	研究方法
１年次	○各教員が，研究主題を具現化し，研究テーマを設定する。一つの研究に対して，教育学部大学教員１名以上と共同研究を進める。
２年次	○１年次の研究の成果と課題を集約し，学校全体としての研究の重点目標を決め，焦点化していく。これを基に，研究の深化を図る。 ○各教科領域の研究テーマに対する評価を行い，研究をよりよいものにしていくとともに学校の研究主題に対する研究の評価内容や方法を検討する。
３年次	○２年次の研究成果と課題を基に，さらに研究の深化・統合を図る。 ○学校の研究主題に対する研究の評価を行う。

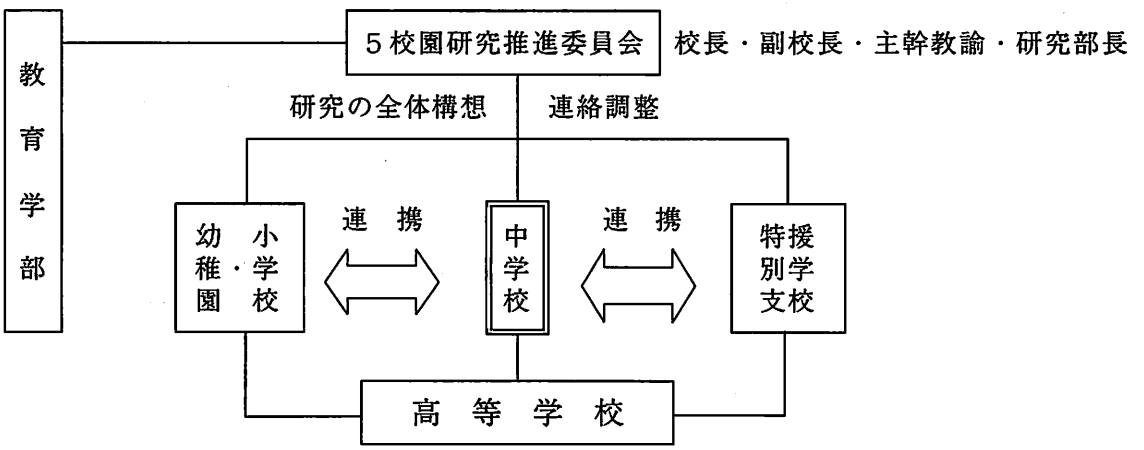
１，２年次の研究と同様に各教科領域で研究主題を具現化する研究テーマ（ｐ16参照）を設定し研究・実践を行う。また，研究の深化・統合を図るためには，各教科領域（単元及び題材）でどのような自立と共生に関わる力を育てたいのか（Ｐｌａｎ），それを可能にするためどのよう

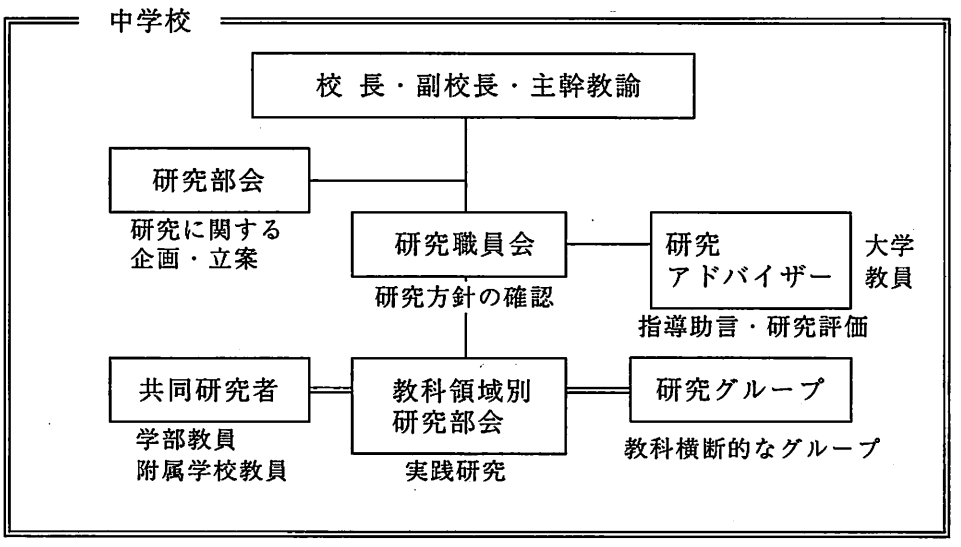
な指導の工夫を設定し，実践するのか（Ｄｏ），そして，それが授業（単元･題材）で確かに育ったのか，さらには，何がうまくいってうまくいかなかったのか（Ｃｈｅｃｋ），どのようにすればよかったのか（Ａｃｔｉｏｎ），という問いを常にもって実践していかなくてはならない。そこで，研究的な意図のある公開授業及び研究会によって，次のようなＰＤＣＡサイクルを機能させ，すべての教科領域で実践的な研究の推進と授業改善を目指した。

時　期	研　　究　　内　　容	サイクル
３～６月	研究テーマの見直し，研究計画書の作成 研究大会資料作成・研究大会指導案作成 ※共同研究者との共同研究	Ｐｌａｎ
６～９月	第92回　愛媛教育研究大会（中学校の部）授業研究会　等	Ｄｏ
９～12月	研究紀要の作成	Ｃｈｅｃｋ Ａｃｔｉｏｎ
２月22日	愛媛教育研究大会（中学校の部）研究発表会	

この研究計画を基に，研究の精度と指導の工夫の効果を挙げていく観点及び生徒の実態から，２年次と同じ重点目標を掲げ，その育成，醸成を目指し研究を進めることとした。ただ，これまでの研究・実践を通して，「豊かな自尊心・自尊感情の醸成」という点については課題が残ったままであるため，これに関しては，全教科領域を通して必ずアプローチすることとした。

６　研究組織





1，2年次に引き続き本年次も，各教科領域別に研究を進める。また，附属校園での連携や大学教員及び公立学校教員との共同研究を進めることにより，研究実践の質の向上を図る。さらに，校内での教科横断的な研究グループを組織し，全教員が研究主題等への共通理解を図りながら研究ができる体制を整えた。

7　教科領域別研究テーマ

教科領域	研　究　テ　ー　マ
国　語	未来を拓く古典学習へ ―思考力や想像力を養い，自己表現力を高めるための古典学習指導の工夫―
社　会	社会を形成していく力の育成 ―関わり合い，互いに考えを深め合う言語活動を通して―
数　学	数学を活用する力を育てる指導の工夫
理　科	仲間との関わり合いの中で科学的な思考力を養う指導・評価の工夫
音　楽	心が動く，心がつながる生きた音楽活動を求めて ―子どもから大人へ，楽しく，感動する音楽活動の場の創造―
美　術	造形活動における思考の連続性や発達に関する研究 ―感性と知性の往還を目指して―
保　健 体　育	仲間と深く関わり合いながら,体育の本質的な魅力にふれ，運動の内発的動機付けができる学習指導の研究
技　術 ・ 家　庭	持続可能な社会の実現を目指す生徒の育成を図る指導の工夫
	技術分野：e-Learningを活用した自己学習力を高める学習指導の研究
	家庭分野：実践的・体験的な学習活動を生かした指導の工夫
英　語	ＥＳＤを踏まえたコミュニケーション能力を育成する指導の工夫 ―４技能を総合的に育成する言語活動を通して―
行く河	生徒が自分らしく生き抜くための支援

※「行く河」は，生徒の自立する心を育む教育心理からのアプローチを，教科横断的に設定するものである。

第Ⅱ部
教科領域別研究





